

フ	ォ	ー	マ	ル	／	イ	ン	フ	ォ	ー	マ	ル						
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	②			
												大	谷	多	加	志		

「フォーマル」という言葉から最初にイメージするのは、スーツとかドレスとかでしょうか。実は知能検査や発達検査など、心理アセスメントにおいても、「フォーマル」と「インフォーマル」が区別されることがあります。今号では、アセスメントにおける「フォーマル／インフォーマル」をテーマに考えてみようと思います。

今回のテーマは、自分の頭の中から出てきたものではありません。勤務先であり、K式発達検査の発行所でもある京都国際社会福祉センターにおいて、年に3回開催されるワークショップ研修として、「K式発達検査を用いた発達援助セミナー」があります。今年7月開催分が既に終了し、10月と2018年1月にあと2回のセミナーが予定されています。今回のテーマは、この7月のセミナーの際に、講師の1人である和歌山大学の衣斐哲臣先生が蒞蓄(うんちく:セミナーにおいて講師の先生のレクチャー部分をこのように呼んでいます)でお話されていたことに刺激を受け、その時に自分が思ったことを整理してみようと思ったのが、今回このテーマを取り上げたきっかけです。

フォーマルアセスメント／インフォーマルアセスメント

心理アセスメントにおいて、「フォーマルアセスメント」とは、一般的に心理検査類を用いたアセスメントを指すことが多いです。心理検査は、「標準化」という手続きによって、検査の結果を数値化したり、算出された結果を平均と比較したりすることが可能で、個々の子どもの結果を客観的基準と比較して評価することができるようになっています。それゆえに、目的としている心理的屬性

(発達検査の場合は「発達」)をきちんと測定できているか(妥当性)、出てきた数値は信用に値するか(信頼性)についても、標準化の手続きの中で厳密に検証されています。

一方の「インフォーマルアセスメント」は、このような構造化された検査などを用いないアセスメント手法です。一般的には「行動観察」等が中心であり、出会った時の様子や表情、振舞い方、場合によっては服装や化粧の仕方にまで注意を払って観察する場合もあります。臨床的に有用な情報が得られることもありますが、検査のように数値化できるものではなく、評価者の主観も入り込みやすいとも言えます。

このように聞くと、一見すると「フォーマルアセスメント」の方が「インフォーマルアセスメント」よりも上位の存在のように思えるかもしれませんが、実際には相互に補い合う関係にあり、必要に応じて「フォー

ルアセスメント」と「インフォーマルアセスメント」の情報を組み合わせ、対象者の臨床像を総合的に理解することが必要であると考えられています。

フォーマルアセスメントの中の「フォーマル／インフォーマル」

そして実際には、「フォーマルアセスメント」である心理検査を行っている中でも、「インフォーマルアセスメント」は行われています。検査課題や質問に対する反応内容以外の、何気ない発言や行動、様子についても観察し、記録しておくことで、後の見立

てや支援に有効な情報が得られる場合もあります。また、「インフォーマルアセスメント」である行動観察の中でも、「フォーマル」の要素が含まれる場合もあります。チェックリストなどであらかじめ観察のポイントを絞っている場合がこれにあたるかと思えます。また、評価者自体が構造を設定するわけでもなく、設定保育など一定の構造がある場と構造が無く自由に過ごせる場面とでは、行動観察の着眼点も異なります。すべてを「フォーマル」と「インフォーマル」で切り分けることはできないと思いますが、多少の強引さはひとまず目をつぶって、大別して整理したものを表1に示します。

表1 知能および発達アセスメントにおけるフォーマル／インフォーマル

方法	内容	着眼点	解釈
フォーマルアセスメント 知能検査や発達検査など	フォーマル IQやDQなど	平均との比較、領域間の指数の差など	数値等に基づく定形的な解釈
	インフォーマル 課題への反応、検査場面での態度、意欲、興味、行動上の特徴など	課題ごとの反応や課題間の差異、導入時の様子、課題に成功または失敗の様子、検査者への働きかけなど	行動観察に基づく臨床的な解釈
インフォーマルアセスメント 行動観察や聴取など	フォーマル チェックリストを用いた観察や構造がある場（設定保育等）での行動観察など	指示理解、状況理解、周囲の大人や子どもとのやりとりや注目・興味の有無、集団への所属意識など	チェックリスト等による分類と評価、構造的な観察と評価
	インフォーマル 自由場面における行動観察など	構造のない場面での子どもの行動や振る舞い、他者への関心や関わりなど	その場その場の文脈と状況に基づく個別的な理解と解釈

要約すると、「フォーマルアセスメント」の中にもさらに「フォーマル」と「インフォーマル」の視点があり、「インフォーマルアセスメント」の中にもさらに「フォーマル」と「インフォーマル」の視点があるのではないかと思うのです。「フォーマルフォーマル」や「フォーマルインフォーマル」とでも言えばいいのかもしれませんが、そして、大事なのは自分が今どの観点で評価や解釈をしているのかを意識しておくことだと思います。

K 式の各検査項目について『この項目ができたなら、どういう意味があるんですか？どこかに書いてないんですか？』と度々聞かれてきました。それだけニーズがあるというだと思うのですが、残念ながらそのような論文や書物はありません（少なくとも正式に出しているものとしては）。おそらくですが、このような書物を、手引書と併用するものとして発行したとすれば、『この項目ができたなら、〇〇という意味がある』という解釈は「フォーマルフォーマル」なものとなるのだと思います。しかし、発行されてはいません。実際には、各項目で観察される子どもの反応は多彩であり、その評価や解釈については、あくまでも子どもの反応を手掛かりにしながら、その背後にある子どもの認知・言語・感情・対人意識等を総合的に解釈する必要があるからです。つまり、検査項目に対する個々の子どもの反応の解釈はほとんどの場合、「フォーマルインフォーマル」なものです。時折、『人物完成が不通過＝ボディイメージが形成されていない』、『検査者のトラックに積木を積もうとする＝自他の区別ができていない』など、各項目

での子どもの反応が機械的に解釈されているのを目にすることがあります。子どもの実態からみて、妥当に思えるときもありますが、全体的外れのこともあります。上記の『 』の内に書かれているような解釈は、ある検査者がある子どもの反応を解釈した時には妥当なものだったのだらうと思います。しかし、この解釈はどの子どもにでも当てはめられるものではありません。「機械的な解釈」と思える所見を見た時に気になるのは、検査者の方がそこを意識していたのかどうか、という点です。深く考えずに、どこかに書いてあったこと、だれかが言っていたことを、ただ当てはめただけであれば、もはや解釈とは言えないかもしれません。

K 式は検査法として「フォーマルフォーマル」のレベルで行える解釈をあまり用意していません。検査によっては「フォーマルフォーマル」だけで相当量の報告書が書けてしまうものもあるので、それに慣れておられる方からすると、少々不親切だったり、やりにくいと感じられるかもしれません。

「インフォーマルフォーマル」のアセスメントの時もそうですが、アセスメントに際に何らか指標（チェックリストがあったり、なぜその行動をチェックするのかの解説があったりする）があると、特に不慣れた時には非常に助けになります。だから、様々な人が行っている「フォーマルインフォーマル」な評価や解釈について知っておくのは、思考の幅や視野を広げるという意味で、きっと役に立つとも思います。職場で行っているワークショップ形式のセミナーはこの部分を耕しているのかなと、改めて意義を感じたところです。